

# 夢追い人列伝

## その七 「山田隆道伝」

### 初めに

令和3年5月、県バスケットボール協会ホームページに1件のお知らせが掲載された。県内外の有力チームを招き毎年3月に萩市で開催されていた「朝日杯争奪バスケットボール選抜大会」閉幕の報だった。昭和51年に第1回が開催されたこの大会の創設を主導したのが、当時萩商業高校（現萩商工高校）に籍を置いていた山田隆道氏である。

柔和な表情からも仏門に縁がありそうに見えるその名前を、実は「たかのり」と読むことを知る人はそう多くない。出身である山陰地方の体育振興に対する強い思いの下チームの指導に情熱を傾けるとともに、自らが国体選手や県協会審判長として汗を流し、現在は副会長を務めて県バスケット協会を支える氏は、「たかみち」先生で通っている。長く萩商高にあって男女バスケット部を県下強豪に育て、県協会審判長として全県的な審判員育成に情熱を傾けた氏は、一方で車いすバスケットとの関わりを通して障がい者スポーツの振興にも多大な貢献を果たした、多様で多彩な経歴の持ち主である。

本県バスケット界における先覚者の功労を伝える「夢追い人列伝」シリーズ、第七弾は前回の「教員団伝（上）」にも登場の山田隆道氏である。

なお、「車いすバスケット」はかつては「車椅子バスケット」と表記されていたが、本稿では固有名詞を除き「車いす」に統一して表記することとした。また、「障害者」についても、近年「障がい者」と表記されている事情を踏まえて同様に「障がい者」に統一していることを、予めお断りしておく。

#### 山田 隆道（やまだ たかのり）

昭和13年6月生まれ・山口県萩市在住

国士舘大学体育学部卒業

一般社団法人山口県バスケットボール協会副会長・元審判長

元山口県公立学校教員（昭和36年4月～平成20年3月）



### 1 昇格の立役者

山田氏は長門市立仙崎中学校でバスケットボールと出会う。陸上競技部員顔負けのスピードを誇り、中でも100メートル走は負ける者がなかった。身体能力の高さを見込まれてバスケット部に誘われ、次第に競技の面白さを知るようになる。3年次に仙崎中は秋季県体で優勝し、氏は最優秀選手賞を受賞する。市内にある大津高校（現大津緑洋高校大津校舎）は昭和26年の広島国体で4位入賞の実績を持ち、地域的にはバスケット熱も高かった。大津高校入学とともに山田氏はバスケット部に入り、1年次には主力メンバーとして秋田インターハイに出場している。部を率いていたのは故・水嶋哲夫氏であり、その頃から、山田氏は将来の道に教職を考えるようになっていた。



仙崎中学校時代（4番が山田氏）

高校卒業後、氏は国士舘大学に進学する。体育教師を志すからには実績のある専門の大学の門を叩こうという思いとともに、関東の大学で腕を磨いてみたいとの気持ちもあった。ただ、当時の国士舘大学バスケット部は必ずしも強豪とは言えず、所属リーグ（関東大学新連盟）の6部に甘んじていた。

山田氏の入部でチームは目ざめる。1年次からメンバー入りした氏は、今で言うシューティングガードとして八面六臂の活躍を見せ、4年間連続リーグ戦優勝の立役者になった。しかも、毎年入れ替え戦を勝ち上がる快進撃により、氏の卒業時には国士舘大学は2部にまで昇格を果たす。ディフェンスを置き去りにするスピードとシュート力は群を抜き、練習にも励んで自分なりに技術に自信を持つことができたと言っている。

昭和36年、大学卒業と同時に長門市立菱海中学校に着任する。当時は高校体育教員の採用はほとんどなかった。その年に氏は山口教員団の一員として秋田国体に出場している。同校在任わずか2年間で、詳しいいきさつは聞かされないまま氏は下関中央工業高校（現下関工科高校）へと転勤になった。その年に宇部市で開催された山口国体バスケット競技には主力メンバーとして出場したが、校内では陸上競技部の顧問でそれでも選手を中国大会に出場させている。3年目からはバスケット部の顧問となりチームを県大会でベスト8に導くも、同校での在籍4年にして萩に戻るようになった。

## 2 萩にその人あり

昭和42年4月、萩商業高校赴任と同時に男女バスケット部の顧問に就く。指導方法の男女による違いもあり兼任には多少の戸惑いもなかったが、よし、やってやろうという気持ちが勝った。その頃、県北部のバスケット界ではどの種別においても全県に覇を唱えるチームは不在で、山田氏は北浦地域のバスケット再興に強い意欲を燃やしていた。地勢学的な悪条件を越えて山陰での競技隆盛を図りたいとの思いだった。

そのためには、高校での県下トップチーム作りが欠かせない。当時、長北地区では萩高校に一日の長があった。まずは萩高に追いつけ、追い越せの一心で練習には熱が入った。それとともに、地元の選手たちにハイレベルのゲームに触れさせたいという気持ちが芽生える。地元関係者の支援を受けて誕生した「朝日杯大会」は、第1回が参加6チームからスタートしたが、後に福岡大附属大濠高校が名を連ねる。昭和49年に全国優勝を成し遂げた「オーホリ」の名は山口県内にも響いていた。当時の監督、故・田中国明氏は山田氏の5年後輩で、国士舘大学が下関市で合宿練習をした際に知り合う。断られるのを覚悟で打診したら二つ返事の承諾に耳を疑ったと語る言葉には実感がこもっていた。その後次第に規模が拡大し、中学校や車椅子の部が加わって半世紀に及ぶ伝統を築いてきた中、事情により閉幕となったのは関係各校からしても残念な知らせだった。

萩商高には17年間勤め、「年に休みは三日」というハードな練習で同校を県内の強豪校に仲間入りさせた。ベスト8常連校入りを果たし、昭和55年春に初出場以来中国地区大会にも幾度となく顔を出し、「萩に萩商あり」と呼び習わされるようになっていく。

山田氏が今でも忘れられないと語るのが、その昭和55年の中国大会県予選である。メンバ



一が揃い、男女とも優勝候補の一角を占めていた萩商高は順調に4強へと勝ち上がる。当時は、最終日に準決勝、決勝の2試合を消化するタイトなスケジュールだった。氏は準決勝戦でまず女子チームの采配を振るい、続いて男子のベンチで指揮を執る。どちらもそつなく準決勝を突破し上位3校に与えられる中国大会出場権をひとまず確保した。昼食を取る間もなく女子の決勝戦に臨み、接戦の末、故・枝折幸正監督の岩国高校に僅差でかわされる。次こそはと臨んだ男子の決勝戦は、流れをつかめずこれまた岩国高校に土をつけられてしまう。試合後はベンチから立ち上がるのが辛いほど疲れ切って、自分が出たゲームでもあれほど困憊したことはなかったと苦笑いがこぼれた。

氏がそのセンスを高く評価するプレイヤーは何人もいたが、男子では昭和57年卒のシューター土肥太選手が最右翼で、その活躍によりチームは中国大会に出場し2回戦まで勝ち進んでいる。女子では同じ頃在籍したポイントガードの森次明美選手（現姓柘植）で、見る者をうならせるパスワークは中国大会でも観客を感嘆させた。山田氏は、肝心な時に得点してくれる選手だったと目を細めた。

昭和57年1月の全国選抜大会県予選で萩商高男子が県大会初優勝に輝く。その2年後の4月、氏は後ろ髪を引かれる思いで萩商を後にした。異動先の母校である大津高校でもバスケット部のでこ入れに腐心する中、同窓生として同窓会活動の中心になるとともに全国大会常連となっていたラグビー部のサポート役を買って出るなど、学校の活性化に大きな働きをした。

### 3 審判長時代

萩商チームを指導する傍ら日本協会公認審判員としても県を代表する立場にあった氏は、昭和48年、第3代山本正之氏を引き継いで県バスケット協会審判長の要職に就く。山田氏は、その年に県協会理事長に就任した吉村旦氏の後を受けて山口教員団の監督も務めることになり、ことあるごとにメンバーに審判組織の体制整備を訴えた。

どの種目でも同じだろうが、ゲームの進行管理を司る審判は言わば縁の下の力持ちであり、バスケットでもスポットライトはプレイヤーやコーチに当たる。しかも、バスケットの審判はルールの理解とともに走力や体力も要求され、正面から志す者は少ない。しかし、規則の公正的確な適用が適正なゲーム管理と進行には欠かせず、競技規則の体現者たる審判なくして円滑なゲームは成り立たない。審判員養成は、県全体の審判組織を統括する県審判長にとって質・量ともに喫緊の課題となっていた。

当時の山口県は中国地区でもバスケット先進県とは言い難く、ある年、山田氏が出席した全国審判長会議で日本協会の重鎮が、山口県のバスケット界を称して「日本の辺境地」呼ばわりしたことがあった。かっとなんか熱くなった。以後、氏は審判のレベルアップなくして競技力向上なしの信念を胸に県内の審判員育成に一層励んだ。また、どんな審判であつても頭ごなしにけなすようなことはしなかったと氏は口元を引き締めた。自身が主審を務めた実業団ゲームの講評で、指導に来ていた日本協会の審判長からゲーム中のコールに対する揶揄のこもった叱声を受けた苦い経験があるからである。技術はともかく、審判を務めて人柄をおとしめられるいわれはないとの思いは今も揺らぐことはない。

平成19年発行の県協会60年史『夢を追う』は次のように述べている。

昭和48年4月から58年3月まで10年間にわたって審判長を務めた山田隆道氏は、リーディングレフリーの養成と各連盟所属審判員の底上げに力を注いだ。この時期には、日本

協会公認審判員制度はすでに定着しており、公認ワッペンを胸に中国大会等で活躍する審判員も徐々に増えつつあったが、なお日本公認審判員の技術向上と公認候補者の養成が急がれる状態であった。そのため、県協会の公認審判員制度を見直し、審判員の数的増加や質的充実を図るとともに、各大会における実務的な指導と審判講習会の拡充に余念がなかった。

#### －充実期後期（昭和52年～63年）の記述から－

審判長には二つのスタイルがあるだろうと氏は語る。一つは、自身がリーディングレフェリーとして全国で活躍し後進を牽引するタイプ。もう一つは、トップレフェリーを含めて審判員の指導、育成に力を尽くすタイプ。両者を兼ね備えられれば申し分あるまいが、自らは後者だったと振り返る。ただ、氏の播いた種は、後に国際審判員となる小池正夫氏や日本協会A級レフェリーに昇格した廣田修三氏、後進の育成に功績を残した下関の有澤弘行氏らの登場によって見事に花開く。その後も本県から松本隆志氏などの国際審判員や日本協会上級審判員が次々と出て中央に引けを取らない人材を誇ることになった。それとともに、中国ブロックを初め全国を舞台にした本県チームの躍進が始まる。

山田氏は、昭和58年に審判長を小池氏に引き継ぐ。氏の功績は、何より審判部門をバスケット競技における一つの専門分野として確立し、意識的に審判を志そうとする層を開拓したことにあると言えよう。「1笛300円」に始まる試合毎の審判手当の支給も氏の手がけた画期的な改革であった。そうした条件整備が県内から好レフェリーの誕生に繋がり、それは各カテゴリーにおけるチーム力向上と深く切り結ばれるものになった。

## 4 車いすバスケット

氏が車いすバスケットに関わるようになったのは、大津高校への転勤と前後した時期で四十歳代半ばのことであった。昭和56年に日本車椅子バスケット連盟の公認審判員資格を取得すると、卓越した力量により間を置かず中国ブロック審判長の大役を任される。昭和62年には終身公認審判員資格を獲得するなど、車いすバスケットに活動の軸足を移し、それはやがて大津高校を経て萩養護学校（現萩総合支援学校）勤務の呼び水となる。教職生活最後のステージとして障がい児学校を選択したのは、車いすバスケットを通じた特別支援教育との出会いが大きく、53歳にして新天地に身を投じた氏は、定年後も平成20年まで講師として同校に勤務し生徒に寄り添い続けた。

氏の車いすバスケット審判員としての活動歴は枚挙にいとまが無い。県内や中国地区における諸大会はもとより、国内最高峰の日本車椅子バスケット選手権大会では決勝審判員もしばしば務めた。『夢を追う』の「充実期後期」はこう語る。



山田氏が編集に参加した競技規則（山田氏提供）

昭和52年に設立された県車椅子バスケットボール連盟は、安定した活動を模索していた。連盟の発展に向けて組織の継続性と競技スポーツとしての位置づけが大きな課題と

なっていた折、当時の県協会理事長吉村旦氏の尽力により、昭和55年に車椅子連盟が県協会へ加盟できることとなった。……

県協会の第4代審判長であった山田隆道氏は、車椅子バスケの審判活動に情熱を注ぎその発展に貢献した。昭和56年に、日本車椅子バスケットボール連盟公認審判員、……、中国ブロック審判長となり、平成14年まで同審判長として活躍した。昭和62年にイギリスで行われた世界選手権大会ではアメリカ対イギリス戦の審判を務め、また、日本選手権大会には21年連続して参加するなど車椅子バスケットを審判の立場から支えて止まなかった。その献身的な活動と功績、技量が高く評価され、平成10年には日本車椅子バスケットボール連盟から功労賞が贈られ、平成13年には中国地方では初となる財団法人日本障害者スポーツ協会功労章受章の栄に輝いたことは県協会としても喜ばしい出来事であった。



車椅子バスケット世界選手権（昭和62年）

上記のイギリスでの世界大会は、パラリンピック発祥の地とされるストック・マンデビルで開催され滞在は2週間に及んだ。北京オリンピックの際には、大会運営や審判の視察のため氏は日本車椅子連盟から派遣されて現地へ赴いている。また、日本選手権大会で天覧試合の主審を何度も務めたことは特筆に値し、上記の日本障害者スポーツ協会功労章の受章を大きく取り上げた紙誌「おはようアサヒ」は、氏をこう紹介している。

……(山田氏は)八五年からは日本車いす連盟のルールブック作成メンバーに加わり、競技の裾野を広げた。九一年に県立萩養護学校へ赴任し、九九年の退職後も常勤講師として同校へ通う。

車いすバスケットは激しいスポーツだ。選手同士が大きくぶつかり、転倒する場面はしょっちゅう。「なんとか起き上がり、プレーに戻ろうとする頑張りはずごい」。勝負を越えたドラマにひかれている。

—平成13年4月8日付け記事から—

氏が受けた表彰、叙勲も数多い。後には日本卓球バレー連盟公認審判員資格も取得して平成23年の山口国体・山口大会の成功に大きく貢献し、そうした功績により平成25年には山口県障害者スポーツ協会特別功労賞を受賞、同年に山口県選奨を授与されている。そして、平成28年11月の秋の叙勲における瑞宝双光章受章は、幾多の功労の集大成とも言うべき榮譽であった。

## 5 人脈

山田氏はこれまで萩市協会内での役職はもとより県クラブ連盟や県車いす連盟の会長を務め、今も県FID連盟の副会長職にあるなど数多くの役職に携わってきた。昭和58年からは県協会副会長として今日に至っている。その氏を表す言葉は、「温厚な」人となり、「熱意」溢れる指導、審判員としての「公正さ」など候補はいくつもあろうが、最もふさわしいのは「人脈」ではあるまいか。出会いを大事にし、折り目正しく人間関係を築いていけばこそ、校内外の多くの関係者が氏を支えてやまなかったはずである。

その姿勢は教え子に対しても変わらない。萩商高時代、氏は毎年卒業式翌日に自宅にバスケット部の卒業生を招き心尽くしの昼食をふるまった。日々の練習の厳しさは裏返せば鉄は熱いうちに打ての親心でもある。薫陶を受けた生徒たちは山田氏を慕い、今でもことあるごとに協力を惜しまない。

萩商の部員が経済的困窮に陥ったことがある。それを耳にした萩市バスケット協会ゆかりの篤志家が奨学金支援を申し出た。それは、生徒本人よりも山田氏への支援といった性質のものであり、信頼に培われた人脈があって差し伸べられた手だった。

また、萩養護学校では進路担当として生徒の進路先開拓に汗を流した。地元企業に日参し生徒の受入れを依頼して回る。就職率が100%を維持し続けた背後には、知人や教え子たちの力を借りた氏の職場開拓が大きな役割を果たしていた。

県協会の会長交代に際して、国政の要職を務める現河村建夫会長の就任に力を尽くしたのも山田氏である。河村会長は多忙な身にもかかわらず協会の会議に可能な限り顔をのぞかせる。それはこれまでにないことであった。

山田邸の応接間に一幅の掛け軸が懸かる。どことなく西郷南州を思わせる<sup>らいらく</sup>磊落で達筆の書を揮毫したのは、故・柏村勝氏。昭和37年宇部インターハイ誘致に辣腕を振るい、かつて二度にわたって高体連専門委員長を務めた斯界の先達である。柏村先生には何かにつけ教えてもらうことが多く、公私ともにお世話になった。そう語る山田氏の目元に浮かぶのは、<sup>たすき</sup>襷をつなぐという使命感のように感じられた。

## 終わりに

思いがけず取材に時間を費やし恐縮しながら腰を上げたら、教え子が朝方持参したものだがと持ち重りのするブロッコリーを持たせてもらった。お見送りいただいた奥様の丁寧な挨拶ともども低頭しつつ、山田氏を陰ながら支えられたその御苦勞も一通りではなかったろうと思わないではなかった。平成28年の叙勲で上京の折、家族で食卓を囲まれた写真に収まる奥様の屈託のない笑顔が実に印象的であった。その受章を報じた新聞記事はこう締めくくられている。



平成28年秋の叙勲 瑞宝双光章受賞

……。 (山田氏は) 妻の郁子さんへの感謝の気持ちを忘れない。「自費での合宿など経済的な負担もかけたが、好きなようにやらせてくれた」と振り返った。

—11月3日付け「読売新聞」記事から—

氏の一番の人脈は、奥様との縁だったかも知れない。

[文責：顕彰事業委員会]